

## イギリスへ渡った茶 (6)

富山八十八 (とみやま やそや)

## 伸びる茶消費、増える密輸茶・ニセ茶

18世紀初めにイギリスの経済学者が作成した標準的な中流家庭と下層家庭の家計簿モデルでは、茶は中流家庭で砂糖と合わせて週支出の9.5%だが、下層家庭では支出は見られない。

それが18世紀中葉になると労働者家庭で茶への支出が出てきて、18世紀末には農業労働者の家庭でも支出が見られるようになった。

18世紀のイギリスでは重商主義者の主張が強く、輸出は伸ばし輸入は抑える政策が採られた。そのために輸入品には高額関税が課せられた。このことで値段が安い密輸茶やニセ茶が出廻ることになった。

**密輸茶** 1724～84年の60年間のイギリスの茶の関税は年による高低はあるが、最低で65%、最高で125%、平均ほぼ100%だったからイギリスの茶の売値は輸入価格の倍になった。

このためにイギリスの関税を払わないので価格が安くなるイギリス船以外が持ち込む「密輸茶」が増えた。

イギリス東インド会社の経理局長の算定によると1773～82年の10年間にヨーロッパに輸入された茶の各国での消費分は43%で残りの57%がイギリスに密輸されたとしている。

イギリス東インド会社から正規に茶を仕入れている商人たちは多量の密輸茶のために茶が売れず政府に関税の引き下げを懇願した。

## ■広東での各国東インド会社の茶積み込み量

	1741年	1751年
イギリス	33%	14%
フランス	23	10
オランダ	0	60
スウェーデン	21	8
デンマーク	23	8
合計	100%	100%
重量	40745 ピクルス	152842

ヨーロッパの各国東インド会社ではイギリスへの密輸茶が目玉となった。デンマーク会社が増資したのもスウェーデン会社が再生できたのもイギリスへの茶の密輸のお陰だし、30年代にフランス会社もオランダ会社もイギリスへの密輸茶で営業を拡大することができた。

**にせ茶** 密輸茶のほかにニセ茶 lie tea もはびこった。お屋敷から出る使用済みの茶葉を買い集めて乾燥させたり着色したりしたもの。あるいは木や草の葉を乾燥して加工し羊の糞や有毒な緑青、ミョウバンで染める完全なニセものである。ニセものの製造、保有者には罰金が科せられた。

この時代ニセ食品は茶だけでなく小麦粉には石灰を混ぜるなど、砂糖、コーヒー、ビール、ワイン、ピクルス、スパイスなど広範囲にはびこっていた。イギリスは世界に先駆けてヴィクトリア朝の1875年「英国食品薬物法」を施行したが、それでもニセ茶は姿を消すことがなかった。

## 18世紀のイギリス社会の動き

**南海会社バブル** 商業革命によるヨーロッパ経済の活況と貿易熱によって株価が上昇した中で国家の特権を受け南米諸国と貿易を行う「南海会社」法が議会を通過して1720年に株が売り出された。

南海会社の立案者は首相や閣僚、有力議員に極秘に株券を渡し、株価上昇で莫大な利益を得られる方法で買収した。南海会社の総裁に就任したジョージI世はじめ有力者が株を買って手放し莫大な利益を得たので金のある者もない者も株購入に殺到し株価はうなぎ登りに上昇し続けた。

これを見做って泡沫会社が簇生して株を売り出し空前の株価ブームとなった。しかし泡沫会社の1つが倒産したのを機に株価は一斉に暴

落、南海会社株までに及んだ。1720年に起こったバブルは1722年には終焉した。

**農業革命** イギリスの人口は1781年の890万人が1851年には2088万人と70年間で2倍強に激増しているが、食糧自給率は90%を維持した。「これはこの時期に集中的に行われた農業技術の根本的変革や、耕地面積の拡張に基づく農業革命によって整合的に説明できる」(長島伸一『世紀末までの大英帝国』法政大学出版局。1987年)

耕地面積の拡張は「第2次囲込みenclosure」で実現された。「第1次囲込み」は15世紀末から16世紀初めにかけて羊毛業の盛行のために耕地が牧場とされ、トマス・モアが「羊が人間を喰った」と言ったものだった。

地主たる領主は貴族でもあり貴族院を構成している。農業経営が有利となってきたので自分たちの農地を増やすために、それまで自作農や小農業者に開放していた農地を取り上げて領主のものとする「囲込み法案」を貴族院で可決した。そのため開放農地の農民たちは立ち退きを余儀なくされた。14～15世紀の英仏百年戦争で射手として活躍した後は自作農として農村に住み、イギリス農村の軍事的・道徳的バックボーンであったヨーマンは農村から去った。

農村から追われた人びとは新大陸へ移民したり、都会へ出てきてやがて始まる産業革命による工場制労働へ吸収されてゆく。

**産業革命** イギリス綿業界では1760年代から80年代にかけて画期的な機械の発明が相次いだ。これにワットの蒸気機関の発明が結びついてエネルギーは人力、畜力、水力、風力から蒸気機関により革命的に莫大なものをえることができるようになった。

ここに初めて産業に工場制が生まれるようになった。これまでの人間の熟練による手工業は機械に代わり未熟練でも作業ができるようになり、中世以来のギルド制は崩壊していった。

機械化は綿業部門から炭鉱、鉄鋼、機械製造、金属加工部門へとあらゆる工業部門に急速に波及していった。イギリスは1830年頃まで世界に先駆けて産業革命を実現していった。

産業革命は交通手段の改良を生み出してゆく。大量輸送のための大型馬車の出現、そのための道路の改修あるいはターンパイク(有料道

路)の出現。蒸気機関を動かす石炭の輸送には船が便利だとイングランド中に運河網が建設される。

産業革命はイギリスの貿易構造を変えた。基軸産業である綿工業にとっての材料である綿花は自国では生産できずすべて輸入に頼っていた。食糧は急激な人口増加で自給率が低下してイギリスは穀物輸出国から輸入国に変わった。**砂糖** イギリスの茶の消費量に正比例して砂糖の消費量も年々増加していった。

茶やコーヒーには砂糖が欠かせないが、ヨーロッパでの砂糖の価格は18世紀になるとダイナミックに低下して行った。

砂糖の生産は16世紀はブラジルが中心であったが、17世紀になるとオランダ人が媒介してカリブ海諸島での栽培が始まった。イギリスは1627年のバルバドス島に続いてジャマイカでもサトウキビ栽培をはじめ17世紀後半には「砂糖革命」に入った。

苛酷なサトウキビ労働の担い手は白人の年奉公人からアフリカ黒人による奴隷労働に移っていった。

イギリスは奴隷貿易に参加し、リバプール(銃、ガラス玉、綿製品)→アフリカ(奴隷)→カリブ海(砂糖、綿花)を結ぶ「大西洋の三角貿易」によって莫大な利益を上げた。

砂糖生産が増え、砂糖の価格は18世紀前半には17世紀の半値、18世紀の後半にはさらにその半値とダイナミックに下がっていった。

### ヨーロッパの磁器

アジアの茶がヨーロッパ人を魅了したのは茶そのものの香味や薬効だけでなく、茶にまつわる器具、さらにそれらが醸し出す小世界だった。なかでも彼らが賛嘆したのは磁器だった。白くて、薄くて、美しい絵付けの磁器は茶を味わうのにこれほどふさわしいものはなかった。**中国の磁器** 「陶磁器」は正確には「磁器」「炆器セッキ」「陶器」に分かれる。

磁器は中国のものだった。あの白さと唇に吸いつくような薄さは、「カオリン」と呼ばれる白い陶土と「チャイナ・ストーン」と呼ばれる長石を含んだ粘土が必要で、それを1250～1550度の高温で焼成してでき上がる。

炆器と陶器はカオリンは含まず、それぞれ

1150～1250度と1050～1150度で焼成される。

ヨーロッパ人で最初に中国の磁器を運んだのはポルトガル人だった。次にオランダ人が運んでアムステルダムで競売にかけた。磁器はヨーロッパの王侯貴族にもてはやされた。

中国は磁器の本場であるだけに各地に名窯があるが、景德鎮で生産されたものがヨーロッパに渡った。白地にコバルトのブルーで模様を描いたものが代表的で、これは中国で「青花」、日本で「染め付け」、英語で「Blue & White」と呼ばれる。

中国の明王朝は海禁政策をとって外国との貿易は広東1港に限っていた。

この明王朝に17世紀初め万里長城を越えて満州族が侵入し1636年に清王朝を樹立する。明末の中国は各地に乱が起り景德鎮から広東への磁器の輸送がままらなくなりヨーロッパへの輸出が途絶えがちとなった。

このとき長崎出島に商館を構えていたオランダ東インド会社は日本の伊万里へ磁器を発注してアムステルダムへ送った。

絵柄は染め付けのほかに、多彩な色を使った柿右衛門に代表される有田の「色絵」も輸出され、これが当時ロココ趣味が流行していたフランス宮廷で好評を拍した。

イギリス東インド会社は1717年に広東で景德鎮を買いつけて輸入してから、盛んに景德鎮へ注文を出すようになった。

これらの中国の磁器からヨーロッパ諸国でも磁器の制作が試みられる。16世紀のヴェネチア、17世紀半ばのロンドン、パリ近郊サンクレールの軟式磁器、ヌヴェール、オランダのデルフトなどでも試みられるが、厚ぼったい陶器に白い釉薬を塗ったもので中国産のような本格的な磁器はできなかった。

**マイセン** ヨーロッパで初めて磁器製造に成功するのはドイツのマイセン窯だった。

ザクセン国のアウグスト王は高価な磁器を買って漁っていた。やがてアウグスト王は錬金術士のベドガーを召し抱え金づくりに励むが成功せず、代わって磁器の製造を命じた。ポーランド王も兼ね軍事費の調達に腐心していた王は磁器製造に成功すれば大きな富を手に入れることができる。

ベドガーは苦心惨憺、試行錯誤の末に「チャ

イナ・クレイ」と呼ばれるカオリンを入手して粘土に混ぜることで、1709年に初めて磁器の製造に成功した。出来上がったものは中国の磁器とはほど遠いものだった。

ベドガーは赤い炆器セッキの製作にも成功する。これは当時ヨーロッパの社交界に定着しつつあった茶、コーヒー、チョコレートなどのポットとして歓迎された。

「赤いポット」は中国の宜興ギコウ窯でもベドガーのものを真似て製造されてヨーロッパへ輸出されるようになる。ヨーロッパのデザインが中国へ運ばれ、それがヨーロッパへ戻って来て歓迎された。

ドレスデンやマイセンにはベドガーの秘法を盗もうとスパイが溢れた。アウグスト王は城の中にベドガーと工房を閉じこめその技術を厳重に秘匿した。しかしベドガーが37歳の生涯を閉じると、彼の弟子が秘かにウィーン窯に引き抜かれ1719年に磁器製作に成功した。

その後はヴェネチア、1735年にフィレンツェ、1737年にコペンハーゲン、1743年にサンクト・ペテルブルグへと磁器の製法は次々とヨーロッパ各国に広まっていった。フランスで本格的な磁器製作に成功するのは1768年のセーブル窯で、ルイ15世は「ロイヤル・ポルセライン」と名づけた。このようにヨーロッパでは王家の庇護を受けて磁器製造が広まっていく。**ボーンチャイナ** イギリスではヨーロッパ諸国からおくれで1768年にデボンシャーのプリマス窯で磁器製作がはじめて特許をえた。

イギリス磁器を代表する「ボーン・チャイナ」は1750年にボウ窯で始められた。良質のカオリンが入手できないので、牛の骨を焼いて粉末にしてカオリンに混ぜたものだった。このために粘土に粘りがなくロクロ成型では壊れやすいので、成型した型に粘土を押し込んで作るようにしたが、これが同一型の大量生産に適することになった

同じ頃、磁器に手で絵を描く代わりに、「写し絵」の要領で絵を移した。絵のある特殊な用紙を陶器生地に転写して焼く「プリント」の手法がリバプールの二人の印刷工によって発明され、同一絵柄を大量に転写することができた。

ボーンチャイナとプリントがイギリス磁器を代表するものとなった。